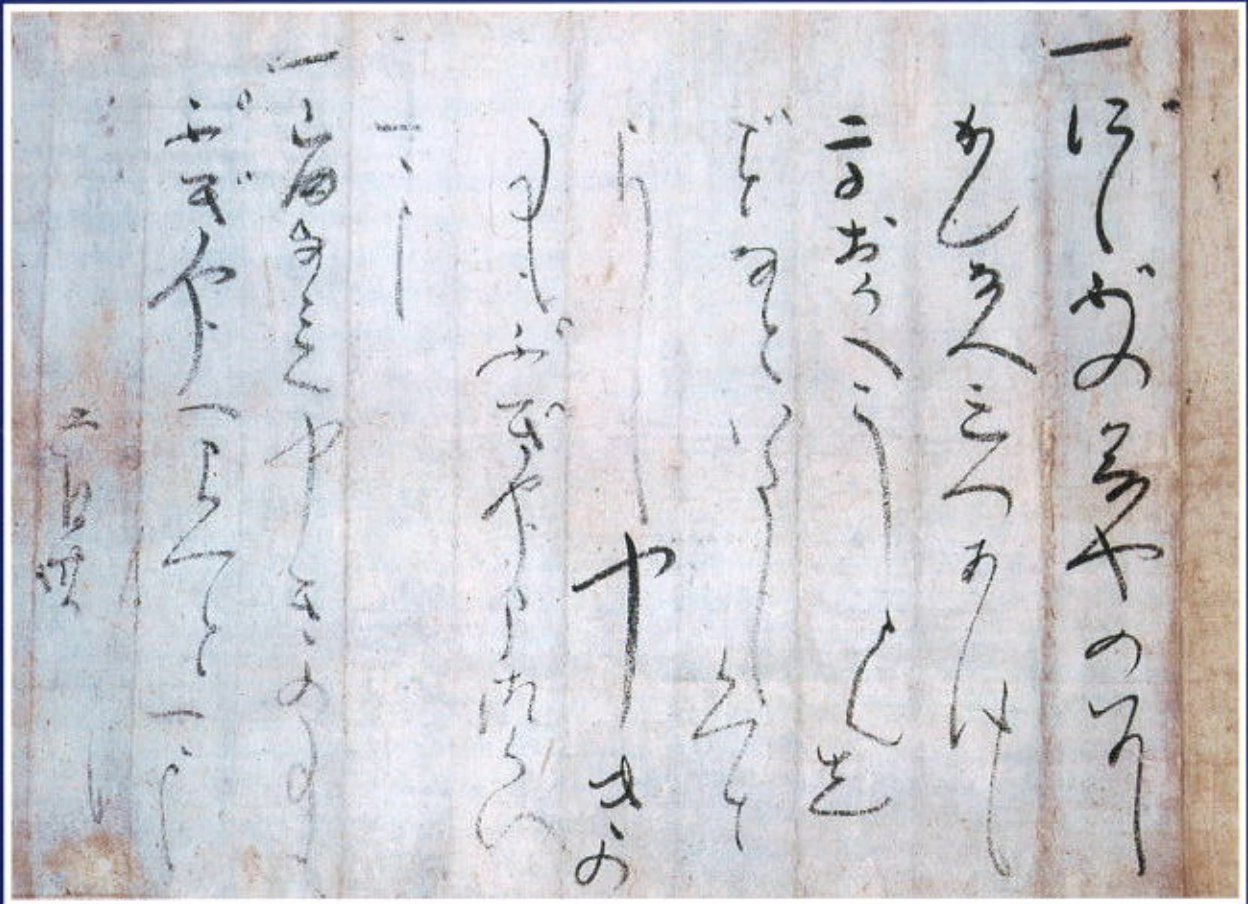


博物館だより



前田利長書状（江戸初期 高岡市立博物館蔵 高岡市指定文化財）

「鑄物の町・高岡」のはじまり

加賀藩二代藩主の前田利長が、家臣を通じて鑄物師たちに命じた文書です。

高岡の鑄物業は、越中^{いもじ}砺波郡西部金屋（現・富山県高岡市西部金屋）の鑄物師を高岡城下の金屋町に呼び寄せたことにはじまります。

今日、「鑄物の町」として全国に知られる高岡の鑄物業は、今から約400年前に下されたこの利長の発案により始められたのです。

（現代語訳）

- 一つ 西部金屋の鑄物師たちが献上した燗鍋三点を受け取った。
今後は、高岡へ引越し、鑄物業を営むよう彼らに伝えなさい。屋敷のことなどについては、町割奉行へ伝えて鑄物師たちの望む所を与えなさい。
- 一つ （以下略）

■高岡産業博覧会、そしてその後

戦後の傷跡もいまだ癒えぬ昭和26年(1951)春、高岡古城公園を会場に高岡産業博覧会が盛大に開催された。

その目的は、「我が国の豊富なる電力とこれを根幹とする産業の全貌を紹介し、併せて地方産業の振興と文化の向上を図らんとする(「高岡産業博覧会開催要綱」)」というものであった。



「高岡産業博覧会 会場案内図」(部分) 当館蔵

73,000坪の広大な会場には、美術館(現・高岡市立博物館常設展示場)をはじめ、電気科学館・テレビジョン館・動物園など23のバビリオンが並んだ。それぞれ趣向をこらした展示がなされ、入場者を楽しませた。

特に、二の丸に設置されたテレビジョン館では、北陸地方としては初となるテレビ放送の初公開となり話題をよんだ。

電気科学館では、ロボットがピラをまいて宣伝につとめたり、質問に答えたりした。また、全国土産品街では、高岡に居ながらにして各地の土産品が購入できるとあって、会場の呼び物の一つとなった。

また、タイの動物園から輸入された動物園の「象の花子さん」や、子供の国の「お猿電車」なども終日賑わいをみせた。往時をふりかえる古老によれば、「会場を順次見て回るのに1日では足らなかった」という。



高岡産業博覧会正門(「高岡産業博覧会誌」より)

51日間に及んだ高岡産業博覧会は、有料入場者だけで620,657人もの入場者が訪れた。これは開催時の高岡市の人口の5倍を超える数値である。また、会場をとりまく桜馬場通り・大仏通り・御旅屋通りなどをはじめ、市内各所ではネオンや提灯、アーチなどが観客を出迎え、産業博覧会はもちろん、市内全体を盛り上げた。

高岡市や富山県の産業を多くの人に紹介し、高岡産業博覧会は盛況のままに閉幕した。

会場となった建物は、その後、高岡市公会堂(現・高岡市民会館の前身)や、高岡市立高岡図書館・高岡古城公園動物園などの様々な公共施設として生まれ変わり、市民の憩いの場となった。

現在の高岡市立博物館の常設展示場は、産業博覧会の際に美術館として建設された。会期中は「高岡産業博覧会美術展覧会」をはじめ、「現代美術展覧会」「古美術展覧会」が順次開催され、著名な作家の作品や国宝級の美術作品などが展示され、人気を博した。

産業博覧会の閉幕後は、高岡市美術館として開館した。

当初は高岡市の商工関係部署の所管となり、以来、市内の伝統産業と密接な関係を保ちながら発展を遂げていく。

その精神は平成6年にこの建物が隣接する高岡市立博物館に編入された後も、脈々と受け継がれている。

高岡産業博覧会の会場となり、その後、半世紀以上にわたり高岡の文化面の拠点となった高岡市立博物館の常設展示場は、平成19年春、老朽化にともない内部施設の改修工事を受ける。

そして、その年の夏には常設展が新装され、新たな生涯学習の場として生まれ変わる事となる。

(学芸員 篠原秀幸 記)

【参考文献】

- 高岡産業博覧会事務局編 『高岡産業博覧会誌』 1952
- 高岡市 高岡市市制100年記念誌 『たかおか 一歴史との出会い』 1991



博覧会開催当時の「美術館」(「高岡産業博覧会誌」より)

■清都家測量器具等関係資料

江戸後期 97点
富山県指定文化財 清都小彦太氏寄贈

清都家は、越中国砺波郡放寺村(現在の高岡市戸出放寺)の肝煎役などを代々務めた家柄である。18代彦右衛門は、射水郡高木村の石黒信由(1760~1836)に算学や測量学を学び、文政2年(1819)には加賀藩から縄張人に任命され、庄川筋をはじめ加賀や能登にまで測量に出た。また、19代彦四郎(のち彦一郎)も、測量技術者として各地で活躍した。

清都家に伝存した本資料は、平成18年に23代の清都小彦太氏から高岡市へ寄贈していただいたものである。

本資料は、測量器具の勾配板や日当用棒、地図製作用具の地割紙・伸縮紙・定木・曲尺・遊表など全97点からなる。

測量及び地図製作の器具がまとまって現存している例は、極めて希少である。特に磁石盤と強盗式磁石台は、石黒信由が文政2年に加越能三州を測量したときのものと同種であり、信由が独自に考案したものである。

本資料は、石黒信由らが極めて精密な加越能三州の郡図・国図・三州図を作製した関係資料として貴重であり、また、江戸後期の測量技術を知る資料としても大変重要である。



磁石盤と強盗式磁石台
江戸後期

◆新収蔵資料紹介(平成19年1月31日現在)

購入	資料名称	数量	分類
1.	上関村今井家文書	1括	歴史
2.	「加能郷土辞彙」(初版)日置 謙編	1	歴史
3.	「富山県射水郡 横田村是調査書」全	1	歴史
4.	前田利長遺言状(写)	1	歴史
5.	四季花鳥図屏風(堀川敬周筆)	1	美術
6.	浅井竹の門宛書簡	23	歴史
7.	「新版加州金沢道中案内記」(歌川富国画)	1	民俗
8.	旧福岡町旧家田蔵資料	1括	歴史
9.	「高岡市地図」(1/25,000)	1	歴史
10.	「因幣中社 射水神社志」高野義太郎著・発行	1	歴史

寄贈	資料名称	数量	分類	寄贈者
1.	鍾秀閣(巖谷一六書、大橋二水為書)	1	美術	岩瀬 ちら氏
2.	清都家測量器具等関係資料	97	歴史	清都小彦太氏
3.	「歴代御陵巡拝図絵」(初三郎鳥瞰図)	1	歴史	個人
4.	納税組合設立承認証(高岡市連信会宛)	1	歴史	吉村 良則氏
5.	昭和天皇御製「立山の」(林 義幹書)	1	美術	古谷 昭史氏
6.	念仏正信偈(林 義幹書)	1	美術	古谷 昭史氏
7.	秋尊論詞感想文(林 義幹書)	1	美術	古谷 昭史氏
8.	入管祝旗	1	歴史	高倉 栄吉氏
9.	藤平長門氏田蔵資料	1括	歴史	藤平 和子氏 瀬本 晴夫氏 瀬本 陽子氏
10.	壽且昌(小松宮彰仁親王書)	1	美術	木谷 和夫氏

資料名称	数量	分類	寄贈者
11. ビクターポータブル蓄音機「オルソフォニック・ビクトローラ」	1	民俗	寺畑 喜朝氏
12. 米軍航空機爆音集(SPREコード)	13	歴史	寺畑 喜朝氏
13. 富山・高岡広域都市計画用途地域(計画案)	1	歴史	個人
14. 富山市主催日満産業大博覧会記念絵巻書	3	歴史	個人
15. 高岡産業博覧会リーフレット	2	歴史	個人
16. 高岡曳山絵巻書	8	歴史	個人
17. 「観光の金沢」リーフレット	1	歴史	個人
18. 拾得物受領証(高岡警察署発行)	1	歴史	個人
19. 愛国婦人会会員認可証	1	歴史	個人
20. 5万分の1地形図「富山」(応急修正版)	1	歴史	個人
21. 2万5千分の1地形図「高岡」(高岡市役所発行)	1	歴史	個人
22. 15万分の1「最新富山県地図」(北日本新聞社発行)	1	歴史	個人
23. 「雄山神社由緒略記」	1	歴史	個人
24. 縫針セット(能町農業協同組合製作)	1	民俗	個人
25. 高岡優良店会「みどりのチケット」	1	民俗	個人
26. 教育物語(乃木希典書)	1	民俗	個人
27. ラジオ体操皆勤賞(射水郡能町尋常高等小学校)	1	民俗	個人
28. 和歌短冊(五十嵐篤好筆)	1	美術	田塚 豊高氏
29. 蔵戸	2	民俗	浅井 義氏
30. 雪ぼっち	29	民俗	森田 力氏
31. 高伏運河建設計画図(1/20,000)	1	歴史	二上 浩之氏
32. 寿老人図(堀川敬周筆、大窪詩仏賛)	1	美術	浅井 萬氏

(受人蔵)

郷土に関する資料の情報を求めています。

歴史資料や生活資料は、社会の変遷や興亡の足跡を理解する上での貴重な文化遺産です。当博物館では、古文書や生活資料などの資料収集を行い、展示に活かしたいと思っております。情報がありましたら、是非ご提供をお願いいたします。

平成19年度 展 示 紹 介

◆常設展「郷土の暮らしと文化」

7月20日(金)～平成20年3月30日(日)

高岡の歴史や文化について総覧的に紹介する。従来までの展示を改め、本年7月20日に展示替えをする。



前田利長画像(長光寺本複製・部分) 当館蔵

◆収蔵品展「新資料展」

4月1日(日)～5月10日(木)

前田利長公の書状をはじめ、県指定文化財の「清都家測量器具等関係資料」など、近年に当館が収蔵した資料を公開・展示する。



堀川敬周筆「漁樵図屏風」(部分)
天保15年(1844) 当館蔵

◆常設展選集「高岡の礎」

4月1日(日)～5月10日(木)

施設改修工事のため臨時閉展している常設展の一部を、新館1階へ移設したものである。高岡の開町からその後の歴史について紹介する。

◆特別展「高岡の町医者たち」

9月20日(木)～12月9日(日)

江戸期の高岡では、佐渡家・松田家・金子家・長崎家・高峰家などの優れた町医者たちが活躍した。そして「神農講」に集い、医学ばかりでなく詩文の研鑽などにも励み、高岡の文化を先導していた。

安永8年(1779)、加賀藩11代藩主・前田治脩の嫡子の眼病を松田三知・金子想謙が治療し、「高岡医者」の名声は高まることになる。

また、佐渡家出身の幕府奥医師・坪井信良のほか、長崎家出身の美術商・林忠正、化学者の高峰讓吉ら著名人も、高岡の医家から輩出された。

本展では、高岡の町医者たちの業績や由来などを紹介する。



引札「佐渡養順・金子想謙」
明治26年(1893) 当館蔵

◆収蔵品展

平成20年2月3日(日)～3月30日(日)

	— 開館時間 — 午前9時～午後5時 (入館は午後4時30分まで)
	— 休館日 — ・月曜日 (国民の祝日にあたるときはその翌日) ・年末年始 (12/29～1/3)
	— 交通 — JR北陸本線高岡駅より 徒歩10分
	— 入館無料 —